

「坊っちゃん文学賞」に見る文学の形骸化

Literature in Ruins -- a Study of "the Bocchan Literary Award"

助教授 田上貞一郎

キーワード

「坊っちゃん文学賞」 文学離れ 文学の形骸化

はじめに

若者を中心に活字離れ、文学離れが指摘されて久しい。その弊害の一つに、書き手志望は山といるが、名作をしっかりと読むという姿勢は消え去りつつある。その結果、最近では文芸誌の廃刊、大学や短大の国文学科、日本文学科が相次いで廃止や名称変更に追い込まれている。その一方では、自治体主催の文学賞が数多く創設され隆盛を極めている。本稿では愛媛県松山市主催の「坊っちゃん文学賞」を例に、文学賞と文学離れの現状を考察し、あるべき理想像を導き出すことを試みる。

1. 文学賞の現状

最近は「一億総表現者の時代」と言われている。アマチュアがノンフィクションを中心に作品を執筆し応募する「投稿ブーム」が続いている¹⁾。その背景には、パソコン(ワープロ)の普及があり、アマチュアでも気軽に書き手になれるという現状がある。また、自治体にとって文学賞は「町おこし」になり、知名度アップや観光客誘致も期待できる魅力もある。

自治体が主催する文学賞は平成14年現在で、60件ほどある表1)。

表1)自治体が主催する文学賞

文学賞名	主催者
長塚節文学賞	茨城県石下町
さいたま市スポーツ文学賞	さいたま市
奥の細道文学賞	埼玉県草加市
太宰治文学賞	東京都三鷹市
北区内田康夫ミステリー文学賞	東京都北区
文の京文学賞	東京都文京区
湯河原文学賞	神奈川県湯河原町
やまなし文学賞	やまなし文学賞実行委員会
小諸・藤村文学賞	長野県小諸市
泉鏡花文学賞	石川県金沢市
一筆啓上賞	福井県丸岡町
森林のまち童話大賞	静岡県天竜市
鳥羽市マリン文学賞	三重県鳥羽市
自由都市文学賞	大阪府堺市
近松賞	兵庫県尼崎市
内田百閒文学賞	岡山県
坪田譲治文学賞	岡山市
真備町ショートショートミステリ大賞	岡山県真備町
坊っちゃん文学賞	愛媛県松山市
中原中也賞	山口県山口市
自分史文学賞	福岡県北九州市

賞金額を見ると、10万円程度から300万円と幅広い。最高額は尼崎市主催の「近松賞」の大賞が300万円で、続いて松山市主催の「坊っちゃん文学賞」、北九州市主催の「自分史文学賞」、岡山県主催の「内田百 文学賞」の大賞が200万円と高額になっている。

全国的に緊縮財政が求められている中、なぜ自治体は文学賞を相次いで創設し、このような高額の賞金を出すのか。そこに矛盾が潜んでいる可能性が高いので、以下検証する。

2. 松山市民の『坊っちゃん』読書率

まず、「坊っちゃん文学賞」を設けている松山市民の市民が『坊っちゃん』をどのくらい読んでいるか、以下のように現地調査した。

■アンケート調査方法

- 1) 調査期日 平成14年9月8日(日)～9日(月)
- 2) 調査場所 松山市大街道および道後温泉周辺
- 3) 調査対象 松山市民(市民であることを確認のうえ実施)
- 4) 調査方法 聞き取りによるアンケート方式
- 5) 質問事項 小説『坊っちゃん』を全部読んだことがありますか。
「あります」の人については「簡単な感想をお聞かせ下さい」、「ありません」については終了。
□だいたいのお年と性別をお聞かせ下さい。
- 6) 調査員 2名
- 7) 調査人数 135名

本調査の目的は、松山市民が『坊っちゃん』を読んでいるどうか、読んでいるとすれば、どのような感想を持っているかである。質問事項を簡略化し、短時間に多数の調査結果を得るように努めた。もう一点、観光地なので市民であることを確認のうえ実施した。また、年代・性別に偏りが生じないように配慮し、幅広い層からの調査結果を収集するように心掛けた。

■結果と特色

調査結果を集計したのが表2)である。

表2)男女・年代別読書数

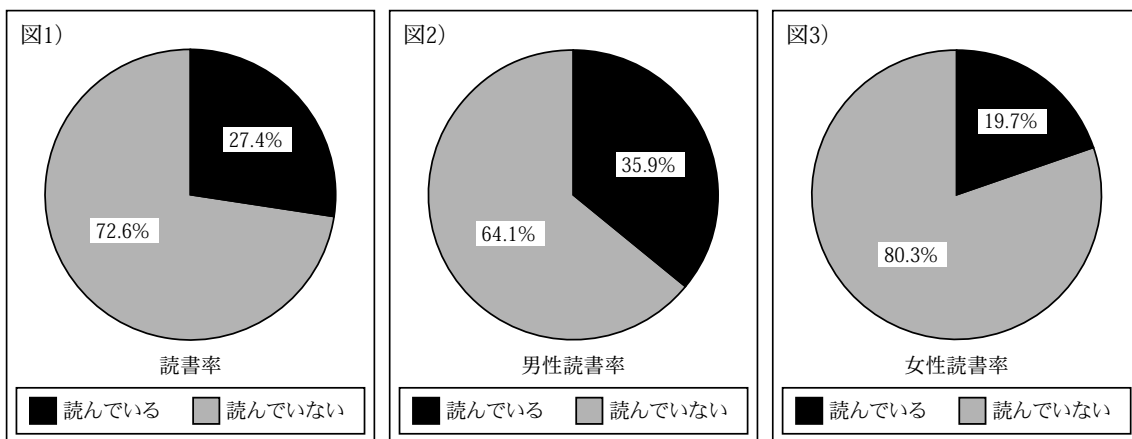
	男 性		女 性		総調査数
	ある	ない	ある	ない	
10 歳 代	0	1	0	0	
20 歳 代	1	9	6	13	
30 歳 代	0	1	2	8	
40 歳 代	3	2	1	6	
50 歳 代	4	13	3	10	
60 歳 代	4	9	1	12	
70 歳 代	10	5	1	5	
80 歳 代	1	1	0	3	
合 計	23	41	14	57	135

(数字は人)

調査した135人中、読んだ経験を持つ人は37人と極めて少数であった。これから読書率を算出すると27.4%となり、松山市民のおおよそ4人に1人しか「坊っちゃん」を読んでいる事実が指摘できる(図1)。松山市の人口は約47万人、それに比べて調査数は135人と少ないが、この指摘は大きく変わらないと思う。

調査結果から、次のような特色が見いだせる。

- 1) 男性について…中高年者が多く読んでおり、若い人ほど少なくなっている。
- 2) 女性について…男性とは逆で20代が高読書率を示している。
- 3) 男女について…(図2)3)のように男性35.9%、女性19.7%と男性の読書率が高く、女性の倍近い。



■ 読んだ人の感想から

読んだ経験を持つ人のうち、語られた感想を整理すると以下のようなになる。これ以外は「読んだが覚えていない」という回答であった。

- 1) おもしろかった…6人
- 2) 松山を宣伝してくれた…2人
- 3) 松山を有名にしてくれた…3人
- 4) 観光地にしてくれた…1人
- 5) 松山をバカにしている…1人
- 6) 松山をけなされたが、今は気にしていない…1人
- 7) 松山在住の人間にとっては、少し不満な内容です…1人
- 8) おもしろかったが、終わり方が気に入らない…1人
- 9) 松山のことを良く書いていないので好きじゃない…1人

1) が6人と圧倒的に多かった。これは松山市以外の読者に共通する感想でもあろう。

2～4) は1) とともに、好感派に入れられる。

5)～9) の反発派は合計5人と少ない。『坊っちゃん』を熟読し、郷土をバカにされたことへの反発であろう。この問題については後述する。

「読んでいない」と答えた人の大半は、恥じらいがちであった。恥ずかしそうに「読んでいません」と答えてくれたのが印象的だった。松山市＝『坊っちゃん』と言っても過言

ではない状況の中、その作品を読んでいないことへの後ろめたさがうかがえた。市内を歩くと『坊っちゃん』一色で、松山出身でちょうど没後100年を迎えている正岡子規の影は極めて薄かった。

伊予鉄道・道後温泉駅の「坊っちゃん列車」前にはマドンナに扮した2人の女性がいた。ともに20歳代と答え、一緒に記念写真に収まってくれたが、『坊っちゃん』は読んでいないとの回答に驚くしかなかった。恐らく松山市が観光協会から依頼されてマドンナ姿で応対しているのだろうが、せめて一度くらいは読了した女性を選ぶべきではないかと思うのは、私だけであろうか。

また、市の出先機関に勤務する男性3人(もちろん市役所職員)にアンケート調査したが、残念ながら3人とも「読んでいない」との回答であった。たとえほんの一部にしる、市役所職員が『坊っちゃん』を読んでいないという事実。その松山市が『坊っちゃん』の名を冠した文学賞を設けている。これには驚くしかなかった。

3. 『坊っちゃん』にみる田舎蔑視

漱石が松山中学に赴任した体験に基づいているのが『坊っちゃん』である。主人公の偽善に立ち向かう正義感あふれる行動は痛快で、『吾輩は猫である』とともに多くの読者を得ている。

しかし、観点を変えると、鼻持ちならない作品である。まず目に付くのが、徹底した田舎蔑視。東京を視点の根幹に据え、当時の松山をこき下ろすこと甚だしい。東京人はこれを読んで痛快だろうが、地方に住む私でさえ抵抗がある。作中の方言一つにしても、松山市民が怒らないのが不思議である。夏目漱石という「文豪」ゆえに許されるのであろうか。もし、現代の作家(たとえば柳美里さん)が書いたとしたら、「名誉毀損」で裁判沙汰になるのは必至である。

調査結果の「感想から」にある「松山をバカにしている」「松山をけなされたが、今は気にしていない」「松山在住の人間にとっては、少し不満な内容です」という回答は住民としては当然の答えである。

さらに、暴露本としての色合いも濃い。教育界(今も濁っているが)の欺まん満ちた内情を、余すところなく活写している。が、書かれた方はたまらない。どう見ても、プライバシーの侵害である。版元は慌てて回収し、問題の箇所を削除した改訂版を発行と、何かに似た対応を迫られるはずだ。発表当時から「モデル問題」が取り上げられたが、時代背景、漱石の知名度の二点から不問にされたままになっている。

『坊っちゃん』に出てくる松山市への侮辱した箇所を、『漱石全集』(第2巻・岩波書店)から拾い出してみる。

- ・「野蛮な所だ」(2)
- ・「気のかかぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に…」(2)
- ・「田舎者はしみつたれ」(2)
- ・「廿五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下だ杯と威張っている人間は可哀想なものだ…」(2)
- ・「こんな田舎者に弱身を見せると癖になる…」(3)
- ・「…四十円でこんな田舎へくるもんか…」(3)

- ・「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかへる様な所へ来たのか…」(3)
- ・「こんな土百姓とは生まれからして違ふんだ」(4)
- ・「田舎にもこんなにも人間が住んでいるか…」(10)
- ・「田舎新聞」(10)
- ・「もう田舎へは行かない」(10)

主な描写を拾い出しても、これだけある。

ちなみに、『坊っちゃん』に出てくる「江戸っ子」という表現は15回、「田舎(者)」は26回を数える。

時代は変わっても、『坊っちゃん』を読んでいると不快感を感じる市民は多いのが当然と思われる数の多さである。もちろん『坊っちゃん』を読んでいなければ、不快感は覚えないが…。

4. 「坊っちゃん文学賞」について

2002～3年で「坊っちゃん文学賞」は8回を数える。第8回の募集要項から、この文学賞のあらましを整理する。

- 斬新な作風の青春文学小説
- キャッチフレーズ…「坊っちゃん文学賞」は、松山市が、まったく新しい青春文学の創造を目指して創った新人作家の登竜門だ。スケールの大きい本格派のチャレンジを待っている。明日は、作家だ。もうすぐ、吾輩は作家である。
- 応募資格 年齢、性別、職業、国籍は問いません
- 審査員 椎名誠 早坂暁 高橋源一郎 中沢新一
- 賞金 大賞 賞金200万円(1名) 佳作 賞金50万円(2名)

この文学賞の企画は、愛媛県内はもちろんインターネット、広告代理店を通して、月刊誌「ダカーポ」(マガジンハウス)の表紙裏(2001年6月20号、2002年9月4日号など)にも掲載、全国的にPRされている。

松山市はこの文学賞にどのくらいの経費を掛けているのであろうか。松山市のホームページに公開されている文学賞に関する費用は次の通りである。

- ・平成14年度 地域芸能文化の振興 第8回坊っちゃん文学賞運営事業
担当課・国際文化振興課 予算額 13,300 千円

予算書には平成14年度は「募集年」で、15年度が「発表年」と付記されている。2年に及ぶ継続事業であることが分かる。「1回の文学賞にかかる費用は4000万円くらいだが、回を重ねるごとに少なくしている」という(松山市国際文化振興課の担当者・杉野豊正氏の談)。

第1回から7回までの回別受賞者数は次の通りである(表3)。

表3) 回別受賞者数

回	大賞	佳作
1	1	2
2	1	2
3	2	1
4	1	2
5	1	2
6	1	2
7	2	0
合計	9	11

賞金を計算してみる。大賞、佳作とも初回から賞金額に変更はなく、受賞者数に多少のばらつきがある。

合計大賞受賞者数 9人×200万円=1,800万円

合計佳作受賞者数 11人×50万円=550万円

賞金総額 2,350万円

一方、7回までの経費を計算してみる。

4000万円×7回=2億8000万円

どの自治体も緊縮予算が強いられている状況下を考えると、膨大な出費であることが分かる。この経費を別の事業に使ったら、相当立派なものになるはず。ぜいたくきわまりない文学賞とも言える。

もう一点指摘できる。7回までの経費が約2億8000万円に対して、賞金総額は2,350万円と10%にも満たないことである。残りの約2億5000万円は広告代理店、審査員の支払いなどに消えているとみたい。公表はされていないが、もしかしたら著名な審査員への謝礼が、賞金額を上回っている可能性の存在をこの割合は示している。

「新人作家の登竜門」という美辞麗句に名を借りた「町おこし」を見事なまでに象徴しているのが、この「坊っちゃん文学賞」ではあるまいか。賞金10%、その他の経費90%は不自然な割合としか言いようがない。応募者は松山市PRに利用されているだけである。とてもプロの作家がこの賞から巣立つとは、今後も考えがたい。

観点を変える。角川文庫『坊っちゃん』の定価は280円(平成14年現在)である。これを7回までの総費用2億8000万円で何冊購入できるか。計算するまでもなく、ちょうど100万冊も買える。1回の経費でも実に142,857冊も買える。これをまず市民に無料配布して読んでもらうのはいかがだろうか。

平成12年10月の国勢調査によると、松山市の世帯数は192,579戸となっている。文学賞1回ちょっとの経費で市内の全世帯に『坊っちゃん』を配布可能という計算が成り立つ。この年の人口は473,379人である。市民全員に一冊ずつ配布するしても、文学賞4回分の経費(4×4000万円)があればおつりがでる。

または、市内の中学生に入学(または卒業)記念に文庫本の『坊っちゃん』を贈るのも一法であろう。これを続ければ、近い将来、『坊っちゃん』を読んだ市民が大半を占めることになる。市民に読破を奨励し、その成果をみるために市民限定の「『坊っちゃん』感想文コンクール」を設けてはいかがだろうか。小学生の部、中学生の部、高校生の部、一般の部である。読書感想文の審査なら、著名な作家先生は不要で市内の国語教師で足り、経費節約にもなる。

まず、読者を増やすことが先決である。これこそが、予算書の項目「地域芸能文化の振興」と合致し、地に足着いた行政となろう。

そのうえで、文学賞でも何でもしてはいかがであろうか。市民が読んだことのない小説を冠した文学賞を設け、膨大な経費を掛ける。これこそ文学から遊離した、滑稽きわまりない市政と後世の人から嘲笑を買う可能性も考えられる。その前に再考されるのを期待する。

5. 進む文学の形骸化

文学の形骸化はとどまるところを知らない。

平成15年度から高校で使われる教科書から森鷗外は完全に消え、夏目漱石の作品はかろうじて2種類に残ることが決まった。基礎学力を重視した新学習指導要領によるもので、代わって芥川龍之介が作家のトップになるという。「教えにくく難しい」が主な理由のようだが、長年国民に親しまれた文豪の作品に触れることのない若者が急増するのは必至である。すでに中学校の教科書では、平成14年度の教科書から鷗外、漱石とも完全に消え去っている。「教科書にある」は、その作家の作品を読む大きな契機となってきた。それが消えることは、読まれる率が激減すると考えて間違いない。

現在でも松山市民の4人に1人しか『坊っちゃん』を読んでいないのに、漱石の作品が教科書から消えたら、さらに読む人は減少すると見るべきである。一方では、『坊っちゃん』を冠した文学賞が多大な経費をかけて回を重ねる。ハッキリ言うと『坊っちゃん』とは似て非なるイベントである。イベントだけが一人歩きをして、『坊っちゃん』そのものは読まれない。これを文学の形骸化と位置づけたい。

一方で「文学作品は読まないが、文学的雰囲気に関心がある」という困った人が急増している。インスタントに触れられる相田みつをの詩に対する根強い人気も、その象徴の一つである。時間を掛けて活字を追う面倒な作業など必要がなく、簡単に文学的欲求を満たしてくれるのが魅力となっているようだ。

まだある。私も時々案内役をしている生涯学習の文学散歩である。その作家の作品は読んだことがなく(「読もう」という意志のある人も少ない)、ただ足跡を訪ねて文学的雰囲気に関心を持って満足しているのである。これもインスタント志向を象徴する現象である。

この文学に対するインスタント志向は、今後も拍車がかかることが容易に予想される。これらはすべて、文学の形骸化の現象である。

おわりに

以前、温泉地・熱海が新婚旅行先のトップを誇っていた時期があった。格好の観光スポットとして、新婚カップルは「お宮の松」の前で記念写真を撮る。これは『金色夜叉』を読んでいないからこそできた技で「おめでたい」としか言いようがない滑稽な光景であ

った。お金に目がくらみほかの男性と結婚するお宮、それを足蹴にする貫一、新しいカップルの未永い幸せの一步である新婚旅行の記念写真として、史上まれにみるミスマッチと言わざるを得ない。

松山市の文学賞と市民の『坊っちゃん』読書率の低さは、新婚カップルが「お宮の松」の前で記念写真と何ら変わることがない滑稽きわまりない珍現象である。これこそ、漱石が『坊っちゃん』で「田舎者」と嘲笑したことが、百年たっても変わっていない証明という見方もできる。知名度を上げ、観光客を誘致さえすればどんな屈辱にも耐えられる精神には驚くしかない。市民を無視した市政であり、文化振興とはほど遠い愚策としてのそりは免れない。

松山市の文学賞は、多少なりとも観光客の増加に効果を上げているかに思えた。「軋むハイウェイ」（読売新聞・2002年11月26日）という特集記事を引く。

松山・道後温泉の入浴客数も、尾道・今治ルートが開通した99年度は増えたが、その後急減し、去年は過去50年間で最低だった。松山市は「しばらくは上昇すると思っていたが、まさか一年で失速するとは」と落胆を隠せない。

本四架橋の開通による「ストロー現象」を特集した記事である。「ストロー現象」とは交通ネットワークの整備によって、消費が大都市に吸い上げられることをいう。これによって「過去50年間で最低」の入浴客数を記録したと伝えている。膨大な経費を掛けた「文学賞」も本四架橋の開通による「ストロー現象」の前にはまったく無力であったことが判明した。

作家の名前を冠した文学賞が全国的に流行しているが、文学に名を借りた宣伝活動に過ぎない。文学離れを幸いに、宣伝活動に利用しているだけである。これを後世の研究者は、文学が形骸化した時代を象徴する滑稽な現象と位置づける可能性が高い。

参考文献

- 1) 田上貞一郎『「新聞投稿」達人教本』（廣済堂出版）で詳述した。